

さまざまな経験やそのときどきの想いを糧に築きあげて昨日より今日、今日より明日の人生を充実させている、栗谷川柳子さんの生き方を紹介します。

## 「おせっかい」の人つなぎで地域をにぎやかに

栗谷川柳子さん  
(三戸町)



【Profile】三戸町出身。2010年にノースブレッジ合同会社を創業し、代表を務める。大学での起業支援や地域における起業家支援拠点をつくり、地域に眠っている資源に光をあてるべく活動中。平成27年度青森県いきいき男女共同参画社会づくり奨励賞受賞。

### サラリーマンから大学での学びを経て起業へ

南部町の古民家の扉を開けると、お座敷にある懐かしいこたつ。栗谷川さんが経営するノースブレッジ合同会社で運営している「きたむら茶屋」は、小さな起業家たちが気軽に集う南部町の憩いの場です。「きたむら茶屋は、別名『説教部屋』と呼ばれているんですよ」と話す栗谷川さんは、ここに集まる起業家の支援をはじめ、地域を温かく見守り、盛り上げるサポートをしています。

栗谷川さんがここで起業家たちのサポートをするのには、自身の経験が原点になっています。商店街のなか、売手に困まれて生まれ育ったからか、サラリーマンとして仕事をしているときから「自分で何かやりたい」という思いがあったという栗谷川さん。働いていた勤務先の民事再生と、離婚、そして病気が重なった2009年は、ちょうど八戸学院大学が起業家育成講座を開講した年でもありました。一念発起して

会社を退職し、起業家育成講座を受講することに。講座を受講したことで「何に興味があり、どんなことをしたいのか」を突き詰めて考えるきっかけになったといいます。

### 変化を恐れず、柔軟にかたちを変えていける会社でありたい

2010年に起業してから、農産物流業、飲食店経営、起業家支援と、さまざまな事業に挑戦してきた栗谷川さん。一見ばらばらな方向性に見えますが、やってきたことには一貫して叶えたい思いがありました。

「小さい町や村に眠っている、埋もれている資源。それらを磨いて宝に変えていきたいというのが、わたしのミッションです。たとえば、物流を始めたきっかけは南部町の廃棄トマトの山なんです。完熟で収穫されたトマトは、出荷するには熟しすぎているそうで、廃棄するしかない。でも、一番美味しい状態のトマトを捨ててしまうのはもったいない。だから関東のレストランと直接契約し、直送する物流を始めました。地物野菜を使ったレストランを開いたのも、起業家支援も、原石を見つけ出して磨いて宝にするという部分は変わらないんですよ。」

事業に取り組むなかで、もちろん挫折もありました。起業して1年も経たないうちに、東日本大震災が起こったのです。物流が断絶してしまっただけで、運送と飲食店があって初めて物流事業が成り立っていたことを気付かされたのだそう。会社としてさまざまなことに挑戦してこれたのには、変化を恐れずに柔軟にかたちを変えていける会社であることが、地方で生き残る企業になるために必要なことだという栗谷川さんの思いがあったからでした。

### 足りないものを補い合う人のつながりが街を元気にする

栗谷川さんは自身が起業した当時、今起業したい人や、起業したばかりの人が集まるような場所がなかったのだそう。そこで2009年、「八戸ビッグバレー」という情報交換の場を主催します。「まだ一人前ではない、何かが足りない人たちが、助けを求められるのもちょっと下手なんですよね。『ここができないから助けてほしい』とお願いでいる人が増えたら、心身ともに支え合えるグループになると思っています。きたむら茶屋でおせっかいは焼くのも、同じ理由。くっついてやればうまくいきそうなことも、本人同士だと動きづらいですよ。周りの人が繋げ役になってあげたほうがスムーズだったりするんですよ。共感できる人や、共感してくれる場があると、一歩踏み出す勇気をもらえる気がすると思うんです。」

栗谷川さんがつくる居場所から生まれたつながりが、また新たに街を元気にする種になる。そんな種まきを栗谷川さんも楽しんでるようです。仕事と家庭の両立も、うまくバランスをとることで乗り切れたといいます。「子育てや介護など、まだまだ女性はケア役割が多いですよ。女性が自分のことにかまっていられる時間はとても短い。だからこそ、日常生活を存分に楽しむことが大切だと思います。『まだまだやりたいことがたくさんあるという栗谷川さん。まだまだ描ききれいていない栗谷川さんの壮大なビジョンに、たくさんの人がつながり、関わっていくことでしょう。』

(取材：鈴木 麻理奈)